

Piers Plowman と *Paradise Lost* :

「如何に真理を知るか」のテーマの 展開について

有 路 雍 子

14世紀は信仰の時代とみなされながら、一方では、M. E. Thomas によれば懐疑の時代でもあった。聖職者の偽善と怠惰に満ちた乱脈な生活ぶりから生じる反聖職者的動き、都会人に見られる横柄な不信心、平信徒の教義に関する様々な批判、不可視的神秘の世界を信じない物質主義者、そして敬虔な者達の中にも、様々な面で疑惑や動揺が見られた¹⁾。こうした時代の風潮は、Langland の *Piers Plowman* のプロローグの中に詳細に描き出されている。

The evils of the world, proceeding either from the operation of natural laws or from social conflict, have provoked prodigious groans that echo noisily down the centuries. And above the groans rise voices of conjecture, reason, faith ultimately pose the perennial and wistful question, "What can a man believe?" Many moderns are prone to look back on the good old days of calm acquiescence and belief and to long for the easy serenity of the medieval Age of Faith. . . But. . . find the same unrest, the same doubts and fears, the same insoluble questions. . .³⁾

中世の神学が不可視的、根源的真理を如何に知るかという問題を展開させていったのは、ある意味では上記のような時代のもつ問題への対処の仕方として、要求された結果と考えることができよう。そして Langland も又、如何に真理を知るかという問題を中心に、その文学を展開させていくのである。プロローグにおいて、地獄と真理の宮廷の中間に位置する現世の

ありのままの姿を描き, Meed のエピソードを通して, 真理とは正反対のものに対するこの世の愛をさらに指摘し, 真理に対しては, 巡礼達も Will も “haue I no kynde knowing” (I, 136) “I haue no kynne there!” (v, 639) であると述べ, Will をしてこの失われている真理を知る (to know kyndey) ことを目的として旅に出発させている。(know kyndely の反復が Will の目的を明らかにする。)

An Apology for Smectymnuus において, Langland を satirist として高く評価している Milton も, 同じような社会状態の中に置かれていた。というより, むしろ社会の現象を同じような観点に立って眺めたと言える。Langland のプロローグからの一節と Milton からの引用は, これを明らかに示してくれる。

I fonde there fresis alle the foure ordres,
 Preched the peple for profit of hem-seluen,
 Glosed the gospel as hem good lyked,
 . . .
 There preched a pardonere as he a prest were,
 Brouzte forth a bulle with bishopes seles,
 And seide that hym-self myzte assoilen hem alle
 Of falshed of fastyng of voves ybroken.
 Lewed men leued hym wel and lyked his wordes,
 Comen up knelyng to kissen his bulles; (Prologue, 58—73)

Wolves shall succeed for teachers, grievous Wolves,
 Who all the sacred mysteries of Heav'n
 To their own vile advantages shall turne
 Of lucre and ambition, and the truth
 With superstitions and traditions taint,
 . . .
 Then shall they seek to avail themselves of names,
 Places and titles, and with these to joine
 Secular power, though feigning still to act
 By spiritual. . . (Paradise Lost XII, 508—518)

. . . pride, luxury, drunkenness, whoredom, cursing, swearing, bold and open atheism, everywhere abounding. . . he. . . inclines rather to some carnal superstition, which may pacify and lull his conscience with some more pleasing doctrine. . . easy confession, easy absolution, pardons, indulgences, masses for him both quick and dead. . .

(*Of True Religion, Heresy, Schism*)

Milton は *Areopagitica* で、真理はキリストの誕生と共にこの世に来たが、再びそれは Osiris の体のようにバラバラに引き裂かれて、四方にとばされてしまった。我々は一つ一つそれは集めているのだと述べていることから、彼の人生の大きな目的として、真理を見い出すことをあげることができる。*Paradise Lost* においても、万物の根源であり、善と力において超越的存在の追求という問題に、誕生後すぐ Adam に直面させている。*Christian Doctrine* では、信仰の回復には “a genuine knowledge of God” が必要であることを説き、事実、墮落後の Adam が、“knowledge answerable” を得て、エデンの園を立ち去ることなどから、*Paradise Lost* の中心に、「如何に真理を知るか」の問題がおかれていると言えよう。社会に蔓延する悪を意識し、それを糺弾すればする程、信すべきものを求める気持がそれだけ強くなり、この問題がクローズアップされてくるだろう。社会というものに対して、同じような立場をとった Langland と Milton が、いわば共通の問題に直面して、それを文学においていかに展開させているかを考えてみたい。

Piers Plowman において、「真理を知る」過程は、Piers と巡礼のエピソードにあらかじめ提示されている。巡礼の一行が真理に至る道を Piers に尋ねた時、Piers の示した道は Meekness—Conscience—Charity である。Meekness は “Free from haughtiness and self-will; patient and unresentful under injury and reproach” (O. E. D.) を意味している。Piers は巡礼の一行を真理の宮廷に案内することを約束して、まず半エーカーの土地の耕作の手伝いを要請し、こうして労働がはじめられ

る。Piers は仕事を捨てて遊びほうける怠惰な者共に悩まされる。それは Hunger を呼ぶことによって一時的に治まるが、Hunger が立ち去ると、再び元の状態にもどる。しかし真理 (Truth) は、Piers に半エーカーの土地に留まることを命じ、本当に Piers の労働を助ける者に免罪符を与えると告げる。この免罪符の有効性の問題が、Piers がこれを破り捨ててしまうという面倒な事態と共に、多くの論議を呼んでいる。この免罪符の有効性を論じるには、その前提となる労働の意味を考えなければならない。元来キリスト教は、労働の重要性を認める宗教であるが、St. Augustine の「祈禱は労働をとうしてのみ生命がある⁴⁾。」という考え方が、特に労働の意義を高め、これらの考えを総括したのが St. Benedictus の禁欲主義的修道律であると言われている。禁欲とは元来、消極的、否定的なものではなく、「心的身的な活動」という積極的意味を持つという。それはいわば自己を働かせることで、竹内正二氏によれば 1, 断食, 精進, 住衣寝の禁欲, 純潔, 等に示される我欲の克己, 2, 個人的祈禱や瞑想, 公的共同礼拝や祭式による精神の高揚, 3, 労働という三つの形に分けられている。これに基づく修道律は、この三つを表裏の調和関係として強調し、労働をこの我欲の克己の具体的形として重んじる。したがって労働は最高の贖罪行為とも考えられていたという⁵⁾。さて、Truth の免罪符の説明 (VII, 9 以下) に流れる一貫した思想は “He hath ynough that hath bred ynough though he haue nouzt elles; Satis diues est, qui non indiget pane.” (VII, 86), 即ちあらゆる意味で我欲を捨てること、つまり Piers の言う Meekness であると思う。Piers の次の決意の言葉は、

I shal cessen of my sowyng. . .and swynk nouzt
 Ne about my bely-joye so bisi be namore!
 Of preyers and of penaunce my plow shal ben herafter,
 And wepen whan I shulde slepe though whete-bred me faille.

(VII, 115—121)

根底にある Meekness とそれを高揚する祈りや祭式、それらと一体にな

った労働を指している。前述の *Hunger* のシーンでは、「働くか、さもな
くば飢えるか」という労働、即ち自己を満たすだけのものとしての労働で
あった。*Turth* の言う労働は、自己を捨てることから生れる他のための
労働である。*St. Benedictus* に見られる意義深い労働と同じような意味
で、*Piers* が労働を理解し得たと考えるべきであろう。*Piers* がなぜ免罪
符を破るか。勿論、免罪符の有効性の否定ではなく、表面的な労働の理解、
形式だけの免罪符の流布の風潮に対する *Piers* の憤りと、その風潮の打
壊と考えるのが妥当と思われる⁶⁾。同時に、*Piers* の免罪符のエピソード
をとらして、我々は真理を知る上の第一歩としての *Meekness* の重要性
を理解することができる。

Passus VIII から *Will* を中心に「如何に真理を知るか」が展開されて
いく。注目すべきことは「知る」ことが、*Will* によって「見る」とことと
結びつけられていることである。

Ac if I may lyue and loke I shal go lerne bettere. (VIII, 58)

And whether he be man or no man this man (*Will*) fayne wolde
aspye, (VIII, 124)

これに関連して、*Imaginatyf* が次のように述べている。“*Clergye and
Kynde Witte comth of sight and techynge,*” (XII, 66) “*For alle her
kynde knowynges (=Kynde Witte) come but of dyuerse sightes.*”
(XII, 137) しかし視覚をとらして得る知識は、魂の救いとはならない。
“*knewe neuere clerk how it (grace) cometh forth ne kynde witte
the wayes.*” (XII, 69) *St. Augustine* は “. . .but my spirit was
wholly intent on learning and restless to dispute. . . .For I wished
to be assured of the things I saw not, as I was that seven and
three are ten.” (*Confessions*)⁷⁾ と告白し、*Bonaventura* は「善に至る
には定義によってではなく、献身によらなければならない。⁸⁾ と考える。
可視的なものの認識を特に重んじ、あらゆるものの認識は感覚からはじま

るとする St. Thomas も、「我々の魂は、身体的なものから離れるにしたがって、離在的、超感覚的なものを受け入れる可能性をそれだけ増大する。」⁹⁾と述べ、人間の感覚的認識の限界を明らかにしている。感覚をとらして理性の内に抽象される概念は、不可視的真理にあてはめることはできないのである。Dame Study の言葉をとらして、Langland はこれを指摘するが (X, 70), Will にはこれを悟ることができない。

しかし Langland は、知識、学問が意味を持たぬものとみなしているのではなく、それなりの価値を評価する。Imaginatyf は特に学問を認め、キリスト降誕の際、星をしるべに訪ずれた三人の博士は Magi, 即ち学問に特にすぐれた者であることが、これを証しすると言う。それらによって神を知ることができないとする St. Augustine も、*Confessions* で、自然の美を見ることが、神への第一歩であると述べているし、St. Thomas も「可感的なものの認識よりしては、神の力の全体を見ることはできない。しかし果は因に依存するものであるが故に、我々はこれらの可感的なものよりして、神についての、それが存在するかということの認識に導かれることはできるのであり、しかもおよそ自らによって原因された一切のものたるかぎりにおける神に必ず適合せざるをえない諸般のことがらの認識を、神について持つまでに導かれることはできる。」と述べている。(神学大全 I ii, 第12項)¹⁰⁾しかし、このような意味で知識、学問を生かすには、前提条件が必要である。

‘Axe the heighe wey,’ quod she ‘hennes to Suffre-
Bothe-wel-and-wo gif that thow wolt lerne,
And ryde forth by Richesse ac rest thow mauzt therinne,
For if thow couplest the ther-with to Clergye come-stow neuer
And also likerouse launde that Leccerye hatte,
Leue hym on thi left halue a large myle or more,
Tyl thow come to a courte Kepe-wel-thi-tongue-
Fro-lesynges-and-lither-specke-and-likerouse-drynkes.
Thanne shaltow se Sobrete and Symplete-of-speche,

That eche wizte be in wylle his witte the to shewe,
And thus shaltow come to clergy. . . (X, 157—167)

この条件は、我欲を捨てることであり、実は後にでてくる *Patience* の教えと一致し、言い換えれば *Piers* の *Meekness* でもある。己の限界を心得て、我欲を捨てること、*Will* に欠けているのはこの条件である。感覚的認識を絶対とする時、感覚的善への欲情や怒りに支配される。この *Will* の状態は、*Scripture* の言葉に怒り、*Concupiscencia—carnis* に従うことにおいて極まる。しかしこの体験は、*Will* が自己を知り、*Patience* に達する一つの過程として扱われている。

We need to fell, and we need to realize this. . . . If we never fell we should never know how weak and wretched we are in ourselves. . . . Without such knowledge we cannot be truly humble. . . .¹¹⁾

同様の考え方が *Langland* の同時代の *Julian* にも見ることができる。しかし、*Kynd* に会う段階では、まだ十分にそれを得てはいない。*Kynd* によって創造された自然を見て期待されるのは、前述の *St. Augustine* や *St. Thomas* の見方であるのに対し、*Will* は *Kynd* の理不尽を追求するからである。これをいま一度戒められなければならない。そして彼は “Now I wote what Dowel is . . . To see moche and suffre more certes.” (XI, 399—341) であると言う。これはこの段階で正しい。“suffre” (to be patient) することによって、知識は正しい方向に向けられるからである。本当の知は愛であり、それに至る道は “Poverty and patience” (XI, 248—254) である。なぜなら “it maketh a man to haue mynde in Gode and a grete wille to wepe and to wel bydde wher-of wexeth mercy.” (XI, 255—256) であるから。

ここで *Conscience* が登場する。彼は *Clergy* と食事をするところになっており、*Will* を招くとともに、貧しい身なりの *Patience* を丁重にもてなす。*Conscience* はまだ多くを知っていないが、*Patience* を良く知っており、*Clergy* からいろいろのことを学ぼうとしている。*Langland* の

Conscience は、Will の真理を知っていく過程に伴って、変化していくのであるが¹²⁾、ここでは、Patience の上に立って真理を知ろうとする人間の心と考えられる。結局 Conscience はもっと多くを知るため、Clergy を離れ、Patience と共に、Will を伴って出かける。彼等がその途上で出会う Haukyn (XIII) の “Actiue life” は、労働と言い換えることができると思うが、その根本にあるのは我欲である。それは Piers のエピソードにおける Truth の説く労働と本質的に異なり、したがって Patience と正反対である。ここに Haukyn を登場させ、罪の告白をさせるのは、Patience に最終的に徹する意図であり、Will が Haukyn の衣の汚れを見ることができることにおいて、彼がそのようなものから脱却しえたことを物語っている。

この後 Will は Anima と会う (XV)。IX によれば、Anima は、*“Kynde hath closed thereinne craftily with-alle, A lemman that he loveth like to hym-selue,”* 即ち、神によって人間の中に入れられた神が自分の如く愛するものである。Anima をとうして、Will は神自らが造った心という庭に育つ Patience の木とその愛の実を見る。「人間は被造物としての自覚から謙虚をもって神の啓示を願わなければならない。」¹³⁾ そうした時に人間は、始めて、

Concerning universals of which we can have Knowledge, we do not listen to anyone speaking and making sounds outside ourselves. We listened to Truth which presides over our minds within us....

Our real Teacher is he who is so listened to, who is said to dwell in the inner man, namely Christ, that is, the unchangeable power and eternal wisdom of God.¹⁴⁾

人間の心の中の真の “Teacher” の声を聴き、神の人間に対する愛を発見できると St. Augustine は説く。この Teacher は “inner light of truth” とも呼ばれている。この点に関しては、この時代の神学者の中で、Bonaventura は、人間の内にある神の愛が内から人間の意志を動かすこ

とによって、人間は神を見る力を得ると考え、Fugo は信仰の窮極は心の中における恩寵の浄福の体験であり、このためには観想の目が必要であるとする¹⁵⁾。St. Thomas は、栄光の光をより多く分有する知性が、より完全に神を見る、即ち神を見るには神の光が必要であると言う¹⁶⁾。Roger Bacon も靈魂を照明する実体によって神を見ることができるという考えの上に立っている¹⁷⁾。それが人間の理性の内に内在するのか、理性の外から照明する離在的力なのかについては異なる点がみられるが、これらの神学者の中に共通していることは、人間はある特別の光を受けて神を見る内なる目が開かれるという思想である。*Piers Plowman* もこのような考えの上に立つものであり、Animaはいわば「心の中の教師」「内を照らす光」とよばれるものであって、Patience に従うことによって、Will の心の目がはじめて神の愛に対して開かれてくることを表わしている。Langland は「愚かな賢者」「盲人」「病いの床にふしたる女」を神の“minstrels”であると言っている。“minstrel”は O. E. D. によれば、16世紀の終り頃までは、“a general designation for any one whose profession was to entertain his patrons with singing, music, story-telling, or with buffoonery or juggling”であって、自らの伴奏に合わせて叙事詩や抒情詩をうたう者という狭義の“minstrel”は、比較的新しい使い方の方である。しかし何らかの形で minstrel が音楽やうたに関連づけることができるなら、これは暗示的である。感覚を越えた世界を心の中に造り出すこと——これは魂のポイエーシス¹⁸⁾であり、詩や音楽の領分である。したがって最も低き者「愚かな者」「盲人」「病床にふしたる女」が神の“minstrel”であることは大きな意味を内包するのであり、それは Langland における真理を知ることにおける、Patience → 心の目というパターンを象徴するのである。

Straight toward heaven my wondering eyes I turned,
And gazed a while the ample sky, till raised
By quick instinctive motion up I sprung,

As thitherward endeavouring, and upright
 Stood on my feet; about me round I saw
 Hill, dale, and shady woods, and sunny plains,
 And liquid lapse of murmuring streams; by these,
 Creatures that lived, and moved, and walked, or flew,
 Birds on the branches warbling; all things smiled,
 With fragrance and with joy my heart o'erflowed.
 My self I then perused, and limb by limb
 Surveyed, and sometimes went, and sometimes ran
 With supple joints, and lively vigour led:
 But who I was, or where, or from what cause,
 Knew not; to speak I tried, and forthwith spake,
 My tongue obeyed and readily could name
 What e'er I saw. Thou sun, said I, fair light,
 And thou enlightened earth, so fresh and gay,
 Ye hills and dales, ye rivers, woods, and plains,
 And ye that live and move, fair creatures, tell,
 Tell, if ye saw, how came I thus, how here?
 Not of my self; by some great maker then,
 In goodness and in power pre-eminent;
 Tell me, how may I know him, how adore.

(*Paradise Lost* VIII, 257—289)

この引用は、Milton のこの問題についての根本を語っている。第一に、Adam の知ろうとする体勢の根本に、“not of my self”，つまり自分の力を問題の圏外に置いていることが認められる。第二に、自分というものの認識も、外界の認識も、「見る」という感覚的認識から始まり、知覚されるものに喜びを覚えているが、決してその形相に捕われていない。知覚しうる形相に求められる以上の幸福を、知覚しうるものを越えた見えない、存在の根源的なものに求めようとしている（...feel that I am happier than I know. VIII, 282）。“I than was passing to my former state Insensible...”（VIII, 291）“my drowsed sense, untroubled...”（VIII, 289）という身体的なものを離れた状態において、彼は vision を受ける。そこで彼は神の声を聞き、その顔を仰ぐ。しかも尚、彼は神を“unspeakable”（V, 156）であると認める。言葉で表

現することは、その物の本質を把握していることを意味するが、彼が尚、自分の能力で神を表現しえないと考えるところに、彼の謙虚が示されている。Milton の「知る」ことの根本がここに提示されている。

これに対して、次の引用文は反対の立場を明らかにしている。

When I behold this goodly frame, this world
Of heaven and earth consisting, and compute
Their magnitudes, this earth a spot, a grain,
An atom, with the firmament compared
And all her numbered stars, that seem to roll
Spaces incomprehensible
...
...merely to officiate light
Round this opacious earth, this punctual spot,
One day and night; in all their vast survey
Useless besides, reasoning I oft admire,
How nature wise and frugal could commit
Such disproportions, with superfluous hand
So many nobler bodies to create...(VII, 15—28)

ここでは Adam は目で知覚される大きさに固執し、それを価値判断の基準にしている。感覚によって得られる形相を絶対化しようとしている。同じことが、Eve の外観の美と “touch” によって得られる快感を最高のものとしてあがめる Adam について言える。こうして感覚的に好ましきものを善として求めることをとうして、欲情に支配され、Adam の墮落が生じるのである。散文の中で、感覚的認識について Milton は次のように述べている。

But because our understanding cannot in this body found itself but on sensible things, nor arrive so clearly to the knowledge of God and things invisible, as by orderly conning over the visible and inferior creature....(*Of Education*)

この限界の認識の上に立って、Milton は神、真理を求めるのである。Adam が墮落した深淵からはい上るには、当然、自己の無の認識を出発点としなければならない。それは Eve にまず見られ、それに対する

Adam の反応においてみられる “humiliation meek” であり、このよ
うな点に立つ時、Adam に新しい目が与えられる。

...but to the nobler sights
Michael from Adam's eyes the film removed
Which that false fruit that promised clearer sight
Had bred; then purged with euphrasy and rue
The visual nerve, for he had much to see,
And from the well of life three drops instilled.
So deep the power of these ingredients pierced,
Even to the inmost seat of mental sight, (XI, 411—418)

Milton の Muse への invocation もこの考え方の上に立って書かれている。

But cloud in stead, and even-during dark
Surrounds me, from the chearful waies of men
...
So much the rather thou Celetial Light
Shine inward, and the mind through all her powers
Irradiate, there plant eyes, all mist from thence
Purge and disperse, that I may see and tell
Of things invisible to mortal light. (III, 45—55)

Milton が視力を失い、それに頼ることが不可能になった時、逆に光が心の中
に輝き、視覚にはとらえられない物を見る目が開かれてくる。*Reformation in England*
においては、Milton は目をおおう膜を “sovereign eyesolve that intellectual ray
which God hath implanted in us” で
潔めれば、真理を知ることができる」と語っている。このように我々は「如何
に真理を知るか」という問題に関して、謙虚 (Meekness, Patience と本質的に
同じである。) ——心の目というパターンが、Milton においても
成立していることを知ることができる。

Langland も Milton も心の目が真理に対してはじめて開かれることによ
って、その出発点に立ったわけである。愛の実のなる木を Anima によ
って示された Will は、Abraham (Faith), Moses (Hope), Samaria 人
を経て、その心はひたすらキリスト一点に集められる。Adam の場合に
も、旧約の時代を順に経ることによって、キリストの降誕という出来事に

向ってその焦点を合わせる。その時、Will は Piers にも Samaria 人にも似たキリストと共に地獄に下り、Lucifer との戦いとその勝利とを目撃し、Adam も又、この出来事を歓喜することにおいて、それを Will と同様、内的に体験するのである。こうして二人共、神の愛を確信する。そして教会 (*Piers Plowman* では Unity と呼ばれる Piers の納屋) の成立を見た時、Conscience は、キリスト者と基本徳目の導き手であり守り手であり、又、すべてを支配する王であり、神の人間に対する裁きの手をゆるめるようにと神に願う仲介者として現われる。即ち Conscience はここではキリストと Piers のイメージと重なり合っている。Will はキリストの愛の成就を体験し、Unity に加わることによって、Conscience において人間の中に Christ-Piers のイメージをとりもどすのである。キリストは人間の罪を “kyndelich to knowe” のため (XVIII, 219) 人間となった。人間も又、真理を “kyndelich to knowe” のために、真理と一つにならなければならない¹⁹⁾。 *Paradise Lost* では、Adam がキリストの愛の体験を得た時、人間は “spiritual armer” をつけた戦士——キリストのイメージをとるのである。こうして人間においてキリストのイメージを認識するのである。「知る」ということは、人間の中に真理——神——キリストを認識することであると言える。

Milton と Langland は「真理を如何に知るか」というテーマの下に、類似したパターンを展開させている。勿論、Langland の Milton への直接的影響であるなどと、簡単に言うつもりはない。中世の神学者、Platonism, Neo-Platonism 等の、夫々への個別的影響もあるだろう。しかし Milton が Langland をかなり意識していた故に、この類似したパターンは面白く思われる。

二人の相異も勿論大きい。一例を上げるなら、Milton は反キリストとの戦いを経て、人間と神との合一は完成され、永遠の合一に至る喜びを強調し、その喜びを現世においてあらかじめ体験させている。その鮮明な描

写は美しく強い印象を与えずにはいない。Langland の場合には、これが表面にあまりあらわれておらず、反キリストとの Conscience, 即ち人間の孤独な戦いが強調されており、したがって Milton に比べると、全体の色調は暗くなっている。Langland の Milton の影響は Spenser を経たものであると Hamilton は述べているが²⁰⁾、この点に関してみればそれは正しいかもしれない。

Milton の文学が、単に主観文学という以上に、そのテーマの展開において、Langland の文学の線上にあることが、改めて認識されるのである。問題をひろげてみるなら、Langland と Milton の間にさらに Spenser を並べてみることによって Spenser, Milton に代表されるイギリスの叙事詩のある一つの傾向を探ることができるのではないだろうか。

注

- 1) M. E. Thomas, *Medieval Skepticism and Chaucer*, Cooper Square Publishers Inc, New York, 1971 による。
- 2) Robert Crowley 編の *Piers Plowman B-text* が 1550 年から 1561 年に三度出版されたので、ここでも B-text を使用した。
- 3) M. E. Thomas, *Medieval Skepticism and Chaucer*, p. 9.
- 4) 5) 竹内正二, 「暗黒時代の精神史」, 吉川弘文館, 1969 による。
- 6) R. W. Frank, Jr, *Piers Plowman and the Scheme of Salvation*, Yale U. P, 1969 (1957) はこの意見に立っている。
- 7) St. Augustine, *The Confessions of St. Augustine*, trans. E. B. Pusey, Dent, London, 1966 (1907), p. 97.
- 8) 速水敬二, 「古代, 中世の哲学」筑摩書房, 東京, 1968 からの引用 (p. 337).
- 9) Thomas Aquinas, 「神学大全」(I, I, 11 項) 高田三郎訳, 創文社, 東京, 1968.
- 10) Thomas Aquinas, 「神学大全」(I, 11, 12 項)
- 11) Julian of Norwich, *Revelations of Divine Love*, trans. Clifton Wolters, Penguin Books, 1966.
- 12) R. W. Chambers, *Man's Unconquerable Mind*, においてこの変化のしかたを cumulative であると言っている。
- 13) 速水敬二, 「古代, 中世の哲学」より引用。
- 14) St. Augustine, *De Magistro* のこの部分は L. L. Martz, *The Paradise*

Within, Yale U. P. 1964, p. 170. から引用。

- 15) これらの要約は「古代、中世の哲学」参照。
- 16) Thomas Aquinas, 「神学大全」(I, 1. 6項)。
- 17) 「古代、中世の哲学」参照。
- 18) プラトン, 「饗宴」山本光雄訳。
- 19) to knowe kyndely, あるいは kynde knowing は二つの意味で使われていると思う。第一は For alle her kynde knowynges come but of dyuerse sightes. (XII, 137) の例で, これは「感覚をとうして得られる知識」である。第二は Will が to knowe kyndely を目的として最終的に到達しえた人間と神との合一, 又はキリストが人間の罪を knowe kyndely のために, 人間となったという例で示される意味である。これは“kynne”という言葉で表わされていることと同じであると考えられる。Will が to knowe kyndely の追求の初めの段階で“see”とそれとを結びつけていたということによって, Will がこれを上述の第一の意味に考えていたということが明らかである。彼が真理について“3et haue I no kynde knowing. (I, 136)”と言った時にも, これは第一の意味で Will が使ったものといえる。kynde knowing は Will の認識の発展に伴って, その意味を変えていくのである。しかしこれら二つの意味が決して相入れないものではないことは, すでに述べたとうりである。

又, Conscience—Christ—Piers というイメージによって, Truth に免罪を与えられた Piers の労働とも結びついてくる。さらに Piers の示した Meekness—Conscience—Charity をとうして真理の宮廷に至るというパターンとの関係についてであるが, 今まで示してきたものと必ずしも細かな部分まで一致するとは言えない。しかし Meekness (Patience) を伴った Conscience がさらに多くを知るために Will と共に出発し, その追求の結果として, Will がキリストの愛の行為をその内において体験し, “Treuthe sitte in theine herte...” (V, 615) に達し得たという大まかな線においては, 共通の線を見い出すことができる。

- 20) U. C. Hamilton, “The Visions of Piers Plowman and The Faerie Queene,” *Form and Convention in the Poetry of Edmund Spenser*, ed Nelson, Columbia U. P. 1961.